

---

**苦悩なハーレム部員（ ）奮闘劇/(タイトル未定)**

ゲーヒーセブン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

苦悩なハーレム部員（）奮闘劇ノ（タイトル未定）

### 【Nコード】

N1486J

### 【作者名】

ゲーヒーセブン

### 【あらすじ】

高校受験に失敗し、滑り止めで入学した高校で生まれて初めて『吹奏楽』という音楽に触れることになった男の子。

担任に急かされてあわてて提出した入部届けに書いた『吹奏楽部』は、部員から顧問まで、全員が女性だった・・・！！

部活と、それ以外のさまざま苦悩に悩まされながら少しずつ成長していく彼の物語。

第1小節 『焦らせた先生が悪い』（前書き）

はい、少し前に『D・live』でも言ってた学校モノ、1話ができたのでアップします。反応しだいで次もアップさせていただきたいと思っっているので、よろしくです。

・・・やっぱ、人の感想って聞いてみたいですね。

では、第1小節、アップします。

## 第1小節 『焦らせた先生が悪い』

市民文化ホールの大ホール、舞台袖。分厚いドアの向こうのある大ホールの舞台に立つのは、今回が6度目だ。

今思えば、何というか、波乱の2年半だったと思うよ。

知ってる？人って自分の理想とはかけ離れた生活を送るから毎日理想を求め続けるけど、いざ理想がそのまま現実になったらとんでもなく焦るんだよね。

「いつもと違うじゃん！！」なんて思いながら。

なんとも個性的な女性に囲まれた（・・・）、笑いと戸惑いが交互にやってくる練習の日々。自分でもよく今日まで続いたもんだと、自分で自分を誉めなくなる。

何も知らないところからいろんな不安を必死にこらえて、とにかく頑張ったな。

それも今日で終わりだ。なんだか寂しい気分だけだね。

あと数分もすれば、僕の最後の舞台（演奏会）も始まる。

数分もあるなら、この2年半を軽く振り返ってみようかな。興味のある人は、こっそり僕の回想を覗き見するといいよ。そんな人にもわかるように、ちよつと語りながら思い出すから。

ある意味、ちよつとした運命だったのかもしれないしね。

苦悩なハーレム部員（ ）奮闘劇ノ（タイトル未定） 第1小節 『焦らせた先生が悪い』

一応自己紹介しとく。僕の名前は涼太<sup>じょうた</sup>。苗字は高校生活ではあまり使われなかったから、ちよつと省略。粉モノとジョーアのブラックが大好きな、高校3年生でクラス委員長兼吹奏楽部部長の17歳（早生まれだからね）。

中学を卒業した僕は、いきなり高校受験に失敗した。行きたかったのは、英語の勉強とバレーボールがしっかり出来る、僕の住む県でも少しずつ進学校として名を上げてきた高校だった。

でも偶然、家から車で30分くらいのところにある1ランク下の県立高校に空きがあったので、2次募集でそこに入学することになった。僕たちの住む県では私学に行く子は割と少数派で、公立高校への進学が当たり前なのだ。……どこでもそんなもんだよね？ その学校には、数人の同じ中学出身の子と一緒に入学することになった。『ミッキー』と呼ばれる男子と、『マナ』と呼ばれる女子。あとは『姫』と後に呼ばれることになる女の子。後は女の子が2人いたけど、それほど話題に出来ないの今今は割愛しておく。

特にミッキーは僕たちの両親いわく、生後1ヶ月検診のときに友達になつたんだとか。物心つく前からの友人だ。

マナは保育園児のころからの友達。特別に恋愛感情を抱くことも無く、そこそこに仲良くやってきた。

この高校で1年生のときはミッキーとマナが同じクラスで、僕がその隣のクラスだった。そのさらに隣のクラスに姫がいた。

僕にまず与えられたのは、真夏は生き地獄とさえ称される風通しの悪い教室。それから、教師になって3年ほど、担任になるのが初めてという新米教師。たしか戦国武将みたいな名前だった。加賀百万石。

入学から1週間が経ったところ。その日は体育館で、『クラブ紹介』なるイベントがあった。その名の通り、2年生に部活動の内容を紹介してくれるというイベントのだが……この学校の部活に興味の無かった僕は寝てました。うつむいてウトウト。

不意に目を覚ましたときには、最後の2組が発表をしていた。そのうちの1つが、僕が入部することになる吹奏楽部だった。生まれてはじめて、トランペットやサクスを生で見た日だった。別に、『発表していた曲に心動かされました』なんてありがちな感情があったわけじゃない。『へえ、こんな感じなんだね』程度のもの。部活をする気は無かった。だからといって、バイトをする気も無かった。まあ自分は帰宅部ができりやそれでいいかな、なんてのんきに構えていた。この日から許される部活への仮入部にも行くことなく、授業が終われば電車に乗って一人で帰る日々を4日ほどすごしていた。

そんな週の金曜の放課後。担任に呼び出された。

僕>「なんですか？」

担>「クラスでお前だけだぞ、入部届け提出してないの」  
入部届けの提出をすっかり忘れていた。

僕>「あ……」

担>「あ、じゃない、今日が締め切りだから、今すぐ書けよ」  
え？そーなの??

担>「そーなの、じゃない、さつさと書け、今すぐ書け」

うるさい、心にまで干渉しないでください。

おまけに、この学校には大っぴらに帰宅部と書かれた帰宅部が存在

しない(どこかのマンガやギャルゲーじゃないのだ)。担任と僕以外誰もいない教室で、何もかもはじめてだし、どこに入るのが無難なんだろうと考えていた。はつきり言って、このときの僕は帰宅部を忘れきっていた。先生は「早く早く」とうるさいし、かといってどこが良いかなんて考えてもなかったから、とりあえず入部届けに書いてある全部活を一通り眺めることにした。

そんなときに目に入った、『吹奏楽部』の4文字。

何も知らない、すべてが初めてなら、何を始めても一緒じゃないか。まあ、『笑ってコエて』の『日本全国吹奏楽部の旅』みたいなノリだろうな。男が2〜4人くらいに、女の子が数十人いて、毎日楽器ができる部活……って感じだろう。

そんなことを思いながら、直感、というよりそのまま目に入った4文字をスルスルと書き込んでいく。ものの20秒もかからずにクラス全員分の入部届けができた、強烈に急かしてきた担任は満面の笑みを見せた。うーん、笑った顔がアンタツ ヤブルの山崎にそっくりなんですけど。

とりあえず自分のすべきことをそれなりに終えて、駅に向かって歩いていく。徒歩5分という交通の便のよさ。

駅前通りにはパン屋や本屋、中華料理屋、図書館や郵便局まである、この街のメインストリートだとか。

駅のホームでは、すでにミッキーとマナが電車を待っていた。ミッキーとマナと僕の3人でする会話のなかで、驚愕の真実を耳にする。

僕>「お疲れ」

ミ>「おつかれ。今日入部届け締め切りだったよね」

ミ>「ぼくは少林寺拳法部にしたよ」

マ>「マジで！？武道系は大変だよ？で、自分は？」

僕>「ああ、僕は吹奏楽部だ」

マ>「えーっ！？あそこって女の子ばっかじゃなかった？？」

.....は???

女の子ばかりってどういうこと???

僕>「え？それって、男がゼロとか.....」

マ>「うん、たぶんそう」

僕はそれを聞くと、何も言わずにきた道を全力疾走で戻っていった。

ハーレムな部活なんて冗談じゃない。変な汗まで出てきていた。走って暑いからじゃない、冷や汗に似たやつ。先生を探すなら、まずは職員室から。

僕>「失礼しますっ！！ 先生はおらっしゃられますか!？」

慌てるあまり、言葉が妙になっってるのは気にしないで欲しい。

先>「知らないねえ.....」

僕>「失礼しましたっ！！」

入学して10日ほどで、僕はとうやら学校全域を攻略できるようです。この学校の敷地内にある建物5つを、全力疾走で駆け抜けながら担任を探した。多分2年や3年らしき生徒がおかしな目で僕を見ていたが、そんなことはどうでもよかった。

『絶対に入部届けを書き直す』

僕はその一心で学校中を駆け回った。焦らせたあの先生を、絶対に捕まえてやる。

でも、結局見つからなかった。学校内の教室はほとんど覚えたのに、先生は見つからなかった。半分諦めながら、もう一度職員室のドアを開けた。

「失礼します！！」

「ああ、さっきの子？10分ほど前に　先生ご自宅へ帰られたよ？」

自分でも嫌になるほど、『諦めたらそこで試合終了』という言葉の意味を知った瞬間だった。同時に、2年半も所属することになる吹奏楽部に、ちよつとした運命を感じた瞬間でもあった。

第1話　終わり

第2小節 『ようこそ、吹奏楽部へ』（前書き）

どうもお久しぶりです。

もう3ヶ月くらい経ってるのかな？とにかく書いてみたんで、まあ物好きな方がいたら読んでみてください。

ちなみに、次話更新に関しては更新するかどうかも未定です……。

では、第2小説、アップしますWWW

## 第2小節 『ようこそ、吹奏楽部へ』

あれから3日が経った。この日付けで、新入部員は本入部することになるらしい。

あのあと大人しく家に帰ったんだけど、どうも落ち着かなかった。

お母さんに話しても、

『気に入らなかつたら辞めればいいじゃない』 とあっさり言われてしまった。

まあそりゃそうなんだけど……どことなくそんな簡単な問題ではない気がするのだから、余計に落ち着かなかった。

何も知らないくせに、人は初めて見たものに違和感を感じたり、ケチをつけたりする時があるよね。

そう思ったときの自分の感覚は、案外当たらない。今回はそれを思い知った1日だったんだ。

## 第2小節 『ようこそ、吹奏楽部へ』

月曜日、その日は朝から寒かった。

いや、4月の中旬なんだから『寒い』なんてことは無いんだけど……

いわゆる『悪寒』ってやつ。友達の何人かに「お前顔色悪いぞ？」と聞かれたけど、何とかごまかし続けた。

「いやさあ、吹奏楽部に行くんだよ」

・・・なんて死んでも言えるか。

後ろの席にいる友達のカツチャンは、『ぼんぼんwww』と半分馬鹿にしたような表情で僕の肩を叩いた。

彼との仲の始まりは、入学式の翌日だった。

僕が筆箱にm-florのステッカーを貼っているのを見て、僕に話しかけてきてくれた。その後話していけば面白いほどに話の馬が合うので、しょっちゅう話すようになった。あのバールってインターナショナルスクール出身なんだってね、どうりで英語の発音が綺麗なわけだ。

カ>「でも俺あそこの顧問の先生好きだけどな」

僕>「そう思うなら僕と一緒に入ろうよ、本気で病んでるんだから」

カ>「俺は英会話部に入るんだ」

僕>「そんな部活あつたっけ・・・?」

まあへこんでいる状態を『病む』とか『病み期』なんて言ってる間は、それほど精神的に追いつめられてはいない。今ならそうハッキリ言える。本当に辛いときは、体が内側から静かに悲鳴をあげるもんだよ。

僕>「あー、腹痛が」  
・・・  
ほらね?

カ>「でも俺はお前が案外長く続ける気がするな」

僕>「え?」

あの、腹痛の心配はナシですか・・・??

カ>「だからさ、お前はどれだけ『辞めたい』って言っても1年、いや引退まで続けそうな気がする」

僕>「まさか、入部前から嫌がつてる僕がそんな訳ないだろ?」

カ>「まあ今日はとりあえず行ってみろって、多分長く続くぞ」

結構不安と緊張でいっぱいだったかと思っていたら、トイレの回数はいつもと変わらないし、昼ごはんの弁当もいつものペースで平らげられたので少し安心した。授業が終わるまでは。

そして、放課後がやってくる。

日が少しずつ西に傾く午後3時15分、授業終了を告げるチャイムが鳴った。

担>「それじゃあ今日はここまで。部活の集まりにはちゃんと参加しろよ」

体が軽く震えてきた。この後はもう部室に行くしかない。行ったこともない吹奏楽部の部室は、学校裏門の目の前、ホールの真向かいにあった。築ウン十年は経ってるだろうと思わせる、古いプレハブ。小さなスライド式のドアに、中側から『吹奏楽部』と書かれた紙が貼り付けてあった。時間的には教室から徒歩5分、はっきり言ってもこの学校は広い。

部室のドアの前まで歩いてきた僕は、そこで足を止めてしまった。

もし本当に男子が1人もいなくて、『何こいつ？マジキモーい（笑）』なんて思われたら？

よくよく考えれば僕は楽器はできないし、楽譜だって読めない。『見学もしないで入ってきて、この程度なの？』って思われたら？

第一、話し相手がいなくてどうなんだよ？

いきなりそんな不安が、一気に僕を襲ってきた。僕は被害妄想が激しいようで、『僕を見ている人の3人に1人は僕の事を笑っている』と、そんなことを考えてしまう。もちろん、シンナーや危ないクスリはやってない。

とにかく、そういう感情がチラリとでも見えたら、僕は動きを止めてしまう。

みんなだつてそうだろ？ 『人からどう思われているか』を考えないと、大体の人は人前で動くことはできないよね？

仕方なくその場に立ち尽くし、どうしたらいいのか頭を抱える。

「はあ……」 ため息しか出なくなる。

それから約3分後。

部室に向かつて歩いてくる、2人の女性。夕日の光を背に浴びているせいか顔は近くに来るまで分からなかったけど、はつきり言っている2人のスタイルは良かった。大人の女性ならではの感じ。

僕の目の前まで来たその2人のうちの1人は、細くて背が低く、あごがしゃくれた僕たちの数学の先生だった。もう1人の背が高くて体つきのエロい人（うまく表現できないけど、なんだか顔から下は一瞬見ただけでドキドキしたんだ）は誰か分からない。

そして、数学の先生はボクのほうを向いて手招きする。

意を決して、僕はその部室の中にゆっくり徒歩を進める。

部室の中は、妙に鼻を突くにおいがした。そして、思ったより暑かった。所々薄い木の板のようなものがはがれている。ますます時代を感じる。

ピアノやキーボードが部屋の隅においてあり、入り口のちょうど反対側の壁に、ドラムや鉄琴・木琴（『ビブラフォン』・『シロフォン』と呼ぶことを当時は知らなかった）が置いてあった。少し黄ばんだ『おばけの太郎』の人形が天井から吊るされているのが、不

気味で仕方がなかった。

とりあえず一通り部屋中を見回す。うん、男子いねえ。

「あっ、男の子いるじゃん!!!」

その先輩の1人の言葉の中にどんなニュアンスがこもっていたのかは、2年半経った今でも分からない。

キョロキョロと部屋中を見回していたら、1枚の写真に目が留まる。それは40人ほどの部員が並ぶ、前年度のコンクールのときの集合写真だった。

(え?・・・おっしやあ!!!)

僕は心の中でガツポーズをするという、文章での表現としてはあまりにもベタな喜び方をした。

その理由は、そこに男子が1人写っていたからだ。地面につけても彼の胸の位置くらいまでの高さがある(と言ってもその人も結構身長が低かったんだけどね)金色の楽器を持った、結構気の弱そうな雰囲気がある人だった。

(そうか、今日は男子は休みなんだよ。多分体調が悪いんだよね) そう思っていないと気持ちが悪く落ちつかなかったんだ。この部の部員は、平均的に可愛い女の子が揃っている。そんな中で今のところ唯一性別の違う存在なので、僕に集まる視線はそれはもう大変なものだった。

今思えば、この目線で気づくべきだったんだ、『僕以外に男子はいない』ってことに。

1年生が自己紹介を済ませ、先輩方と顧問の先生も自己紹介を終わらせる。1年生は僕を含めて8人が入部した。・・・うち6人が2ヶ月も経たずに辞めたけどね。

それが終わると、数学の先生（以下：磯ティ）からの一言があり、1年生は希望する楽器を聞かれる。女の子達はサックスを熱望していたようだけど、7人全員がサックスというわけにも行かないので、数分後には部室外でジャンケン大会が繰り広げられていた。

「で、涼太君は何がしたいのかな？」

もう1人の先生（以下：わーちゃん）が笑顔で僕に聞いてくる。大人の女性のいいにおい。近くで見ると、決して細くはないけど身体全体が適度にふつくらで、僕はなんだか好きだ。

「……いや、デブ専って……そこまで行くと嫌だけどさ。」

「あつ、そ、その、何でもやります!!」

「本当!?じゃあ、ユーフォだね」

わーちゃんはそれまでの笑顔を崩すことなく、僕にそれを手渡した。トイレのスポンがそのまま小さくなったような、銀色の鉄の塊。  
「……え、こんなものが楽器なの??」

## 第2小節

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1486j/>

---

苦悩なハーレム部員（ ）奮闘劇/(タイトル未定)

2010年10月8日22時01分発行